

遊戯から芸道への道のり

—院政時代の蹴鞠文化に関する一考察—

北京外国語大学 北京日本学研究センター

潘 蕾

蹴鞠は中国から日本に伝わり、後に日本で独自の発展を遂げた遊びの一つである。平安時代から江戸時代にかけては、蹴鞠と和歌は公家の素養とされ、流行が衰えることは無かった。また、鎌倉時代には、武士階級でも盛んに蹴鞠が行われるようになり、室町時代を経て江戸時代に入ると、徐々に庶民にまで普及した。こうして、蹴鞠は天皇から庶民に至るまで老若男女の差別無く、広く楽しまれた遊びとなったのである。相手が蹴りやすいように心がけて次々と鞠を渡すようにする蹴鞠は、勝敗のない平和的な遊び方という特徴から、天下泰平・五穀豊穰などを祈る目的としても行われた。

蹴鞠の歴史上、院政時代は大きな転換期と見なされる。この時代においては、後白河院、後鳥羽院の庇護のもとに蹴鞠の名手・達人が輩出して極めて盛大となり、十三世紀に至ると競技として洗練度が高まった。それとともに施設・設備、用具・装束、作法・競技・演技等の様式が整えられて故実ができ上がり、その伝承教授を家職とする難波家、飛鳥井家、御子左家の蹴鞠道の家が成立した。そのうち、難波家と御子左家が後に衰退していったが、飛鳥井流は受け継がれ、明治 36 年には蹴鞠保存会が結成され、現在も京都にある白峯神宮で月 2 回練習を行っている。

本稿では、院政時代の蹴鞠文化にスポットをあて、蹴鞠の遊戯から芸道への道のりを考察する予定である。